

聖学院大学研究所・Evangelische Kirche Deutschland 社会科学研究所後援
 学術と音楽の集い：宗教改革 500 + 1 年
 記念講演会 第1部：学術の集い「多極化する社会とキリスト教の可能性」
 記念音楽会 第2部：音楽の集い「祈りのうた～時を越え、国境を越え、いま私達と共にある音楽」



第1部の講演者 左：Wegner氏 右：Weiß氏

2018年11月24日、聖学院大学チャペルにおいて上記催しが開催された。この催しは、聖学院大学創立30周年と宗教改革500+1年に因み、第1部を現代社会におけるキリスト教の可能性に関するシンポジウム（政治経済学部共催）、第2部をキリスト教音楽の紹介と演奏（人文学部共催）とした。第1部は土方透が、第2部は人文学部の久保田翠准教授がモデレーターを務めた。

プロローグとして、土方が全体の導入および趣旨を述べたあと、第1部では、Evangelische Kirche Deutschland社会科学研究所所長、マールブルク大学教授Gerhard Wegner氏「ルターの自由理解は、文化の壁を超えることができるか」、カッセル大学名誉教授Johannes Weiß氏「世界社会におけるキリスト教、人間愛、人権」と題された二つの講演、およびそれに対する本学学長、総合研究所所長の清水正之教授および土方からのコメントと討論が行われた。

第2部では、久保田准教授の進行と演奏により、コロシアAnnexの合唱をもって、前半では「詩篇と歌」をテーマとしたクラシック音楽の歌の数々が、後半では「広がる祈りの歌」をテーマとし、こどもさんびかや黒人霊歌など、より現代に近い幅広い作品が演奏された。

エピローグは、登壇者および観客も含めた参加

者全員でルター作曲の賛美歌「神は我がやぐら（Ein' feste Burg ist unser Gott）」を歌い、ルター派の牧師でもあるWegner教授と本学のチャプレン菊地順教授による祈祷をもって、この集いを終了した。

なお総合図書館の主催ということもあり、本学が所蔵する宗教改革に係る貴重本の展示も並行して行った。図書館としては、今後も、このような学術的・文化的情報の発信を行っていく所存である。

主催者としては、「学術と音楽の集い」と題したこの催しが、単に両者を並列させたものではないことを強調したい。それは、人間の自由と共存といった問題を、超越との対峙を通しロゴスをもってギリギリのところまで追い詰め明証化させる作業と、ロゴスを超え、芸術によってのみ辛うじて得られる形而上の至高性とを、キリスト教のコンテキストにおいて表現しようとした試みであった。

この目的がどこまで達成されたかは、参加された諸氏による評価を仰がなければならないが、少なくともプロローグからエピローグに至るまで、その趣旨は一貫されたと思う。なお、本シンポジウムをもとに、さらにいくつかの寄稿を得たものが、聖学院大学出版会より公刊される予定である。



第2部音楽会の様子

（報告者：土方 透 [ひじかた・とおる] 聖学院大学総合図書館長、政治経済学部教授）